発掘調査の概要

石神遺跡の調査（飛鳥藤原第129次）

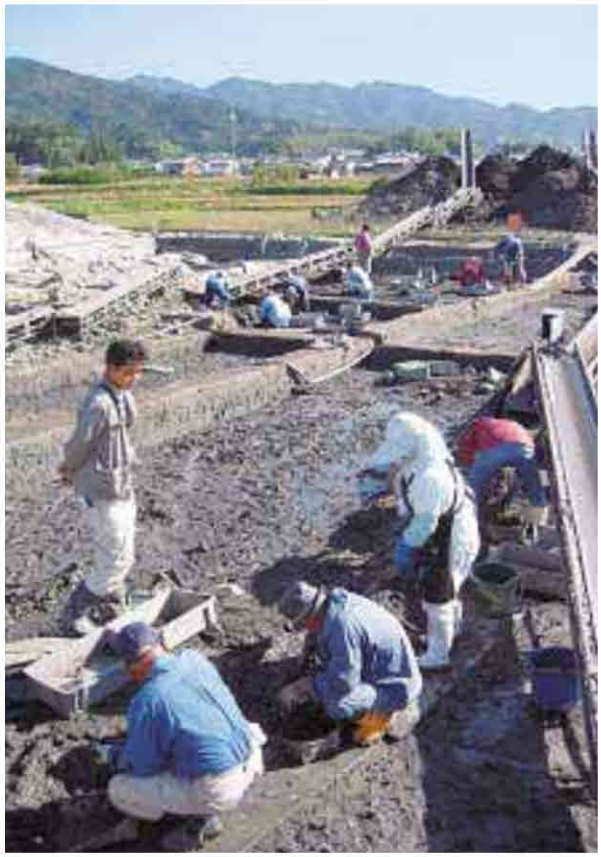
今回の調査は、石神遺跡の第16次調査です。約700㎡で、7月から夏の現場班が調査を開始し、10月になって秋の現場班が引き継いで調査しています。

石神遺跡の施設群の北限から2枚北の水田。調査区周辺の水田の中の等高線をたどると、谷間になっており、とにかく湧水が多い。10月に入って、稲刈りを控えた水田では水が抜け、状況は良くなりました。それでも雨の翌日にはどうしようかと思うほどグチャグチャの現場。作業員からは、「こんな汁い現場はかなわん」との声・・・。

それでも昨年の調査で検出した天武朝の溝や藤原宮期の溝の延長などを検出しました。それらの溝の堆積土や埋め立てた整地土の中からは、多数の遺物が出土しました。金属製品では銅製人形（ひとがた）。木製品では鋤（すき）（一木造り）、下駄（げた）、斎串（いぐし）、琴柱（ことじ）、漆器（まげもの）、曲物（まげもの）、栓（さじ）、匙（こま）、独楽（こま）、糸巻、罫線を引くための定規。土器・土製品では土師器（はじき）、須恵器（すえき）、坩堝（るつぼ）、土馬、円面硯（えんめんけん）、「物部連（ものべのむらじ）」「五十上」と記した墨書土器。出土した木簡の多くは荷札木簡で、「三川国（みかわのくに）」など各地の地名を記したものや、「己卯年（つちのとうのとし）」（天武天皇8年、679）や「壬辰年（みずのえたつのとし）」（持統天皇6年、692）の年紀のあるものがあります。また、税制度にかかわるもの、『論語』の「朋有り遠方より来たる」の部分を習書した木簡もありました。有名な一節であるだけに、当時書いた人に親近感を覚えました。

11月22日には現地説明会をおこないました。前日までとはうってかわって寒くなりましたが、約600名の参加がありました。当日は内田が遺跡の概要と検出遺構を説明し、市大樹が出土した木簡の釈文などを説明しました。また、竹内亮が定規の模型を使って紙面の余白の取り方や等間隔で罫線を引く方法を実演し、大変好評でした。現地説明会資料はカラーのものを印刷することができ、石神遺跡の概要も記すことができたので、少しでも多くの人に石神遺跡を理解して頂ければ幸いと思っております。年末までを目標に調査は継続しています。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　内田和伸）



調査風景（南西から）

現地説明会の風景（後方左が耳成山）